

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

従来の指示詞研究は理論的研究が主流であった。本論文は、その理論を教育現場において実践的に応用する場合の支えとなる実証的研究を目的としたものであり、学位論文としての意義を十分有するものと考えられる。また、日韓母語話者・韓国人日本語学習者の指示詞選択における物理的・心理的な理由の究明を行っている点、日韓の現場指示・非現場指示の対応が異なるケースについて考察している点は、いずれも独創的である。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

第Ⅱ部第3章・第4章及び第Ⅲ部第7章においては、①物理的・心理的遠近感覚、②現実空間と仮想空間の対象認識、③学習者の指示詞の選択要因、等を明らかにするために、日本語母語話者・韓国語母語話者・韓国人日本語学習者に対して、仮説検証型のアンケート調査を実施している。アンケート調査は延べ800名以上を対象者としており、質問項目も研究目的に沿った妥当なものであって、データ収集の方法は適切であると言える。また、第Ⅱ部第5章では、日韓両語の時空・事物の捉え方の相違について、より広範な場面での分析・考察を行い、研究の観点と方法は多岐に亘っており、その意味でも適切であると認められる。このような研究方法は、日本語教育研究の分野において、広く認められている妥当なものと言える。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

本論文においては、上記(2)に示した方法により、膨大なデータが収集されている。そのデータの分析は、出現度数に偏りが有るか無いかを検証するため、比率の差の検定、いわゆる χ^2 (カイ2乗)検定を行っている。これは、標本(サンプル)の相違が母集団の相違として認められるかどうかを検査するものである。その結果、有意な差が見られた場合、残差分析により、どこに差が存在するかを明らかにしている。また、記述言語学のみならず認知言語学的な観点からも考察を行い、これらの適切な分析方法により、有意な望ましい結果が得られたものと認められる。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

本論文では、①日韓の指示対象に対する遠近感の差は、目に見えるが触知できない対象を指す場合、とりわけ顕著に現れること、②現実空間では、日本語母語話者は発話現場の物理的距離のみならず心理的距離の影響も受けるのに対し、韓国語母語話者は物理的距離に強く依存する傾向があること、③仮想空間では、日本語母語話者は発話現場の物理的距離・心理的距離の両者が重層的に現れるのに対し、韓国語母語話者は心理的距離が優先される傾向があること等、その他極めて重要な結論が導き出されている。また、李さんの既発表論文(論文目録1の2・3)は、韓国内での主要な学会誌に掲載され、高く評価されている。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

本論文は、指示詞についての日韓両言語の対照研究として学術的に重要な結論を得ており、そこには、これまで明らかにされていなかった新知見や仮説が多数示されている。また、指示詞の研究を日本語教育の場で生かすための実践的、具体的な提言を行っており、韓国人日本語学習者に対する指導の問題が大きく改善される可能性がある。このように、本論文は、学問と教育の両面において高水準であることが確認され、今後の日本語教育に対して有意義な作用を及ぼすことが確実である。したがって、本論文は、教育の理論と実践に関する諸分野について研究活動するという、連合学校教育学研究科の趣旨にかなっており、博士（教育学）の学位にふさわしいものと判断できる。